川崎医療福祉学会誌　Vol. 12　No. 2　2002　197–208

原　著

岡山・上海・大連における子育てに関する比較考察

姜　　波[*1]　佐々木正美[*1]　八重樫牧子[*1]　徐　祖瓊[*1]　石川瞭子[*1]

要　　約

岡山・上海・大連において，母親の職業の有無，就労時間の長短及び子育ての環境整備，社会状況などの諸要素が子育ての意味・価値観や家庭教育・しつけ観にどのような影響を与えているかということを探るべく比較考察を試みた．

その結果，母親の就労状況は直接母親の子育てに影響を及ぼすことと，国の豊かさと社会福祉状況によって子育ての価値観も変化することが明らかになった．日本と中国の女性の労働力率はそれぞれM型と台形型となっているにもかかわらず，双方の性別役割分担意識を否定する比率が同水準であることが興味深いものであった．

日本も中国もアジアの国であり，古代から交流が盛んだったために，両国の文化・宗教・伝統など多岐にわたってつながりが大きかったが，現代社会では子どもの家庭教育・しつけに関しては異なる結果となった．

以上日本と中国両国の共同研究結果として日中国交正常化30周年の記念に寄与できれば幸いである．

はじめに

日本においては女性の社会進出が増えるに伴い子どもを取り巻く環境が著しく変貌している．中国においても経済の急成長に伴い社会全体が激しい競争の中で揺れ動き，就業率の高い中国女性にとって仕事と子育ての両立が難しくなる一方である．本来子育ては個人の問題とされていたが，今やそれは社会問題の一つとして重要視されるようになってきている．

今まで日本において外国の子育て状況に関する研究や，家族や子育てに関する国際比較考察は多く行われているが，中国の女性の就労や子育て事情や保育状況などの比較研究はあまり行われていない．

本研究は日本と中国の女性の就業状況や子育ての環境整備状況，及びその周辺の問題などを調査し比較考察することを目的とした．

女性の社会進出が家庭・子育て・人生の価値観などに及ぼす影響は大きい．その社会的原因，文化，習慣なども視野に入れ，女性の就労が増えつつある日本の地方都市と女性の就労率の高い中国の地方都市における女性の就労形態・子育て及び家庭・子育てに伴う感情・子どもの家庭教育・虐待の有無・育児と仕事の両立状況などについて調査分析を行い，また先進国である日本と市場経済化の中国における子育てに関する意味や価値観とどのように関連しているのか考察したい．この比較研究を通して，互いに有利なところを見出して，21世紀の少子高齢化の時代に向けて，子どもの心身発達に有益な提言ができれば幸いに思う．

研究方法

1．調査の時間・対象

2001年８月から10月にかけて岡山市・上海市・大連市にある保育園でアンケート調査（表１）を実施した．

表１　調査対象

	配布人数	回収数	有効回答数
岡山	1,417	687（48）	652（94.9）
大連	200	150（75）	150（75）
上海	150	122（81）	122（81）
合計	1,767	959（54）	924（96）

単位：人（%）

岡山市は保育園・幼稚園を利用する母親を対象に保育園・幼稚園の担当者を通して調査票を配布し，後日回収した．１に示したように調査票の配布数は1,417人，回収数は687人，そのうち有効回答数は652人で，回収率は48.5%であった．

大連市と普蘭店市も同様に保育園・幼稚園を利用する母親及び子育てをしている人に調査票を配布

*1 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科
（連絡先）姜　波　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学

し，後日回収した．調査の配布数は200人，回収数は150人，有効回答数も150人で，有効回収率は75％であった．

上海は保育園・幼稚園を利用する母親や子育て中の母親に調査票を配布し，後日回収した．調査の配布数は150人，回収数は122人，有効回答数も122人で，回収率は81％であった．

調査項目の単純集計を行い，グラフを作成した．グラフを分析しながら文献研究をふまえて比較検討を行った．

2．調査の内容

①家族形態（表2），②学歴状況（表3），③女性の就労状況，④子育ての精神状態（焦り感・負担感），子育てに伴う感情（子育てが楽しいかどうか，幸せな気分で子育てをしているかどうか，子育てと生きがいなど），⑤子育て環境（近所との付き合い，友人との付き合い，父親の子育て参加状況，祖父母の育児参加（中国のみ），子育て困難時の相談相手及び子育て知識・情報源），⑥子育て観（三歳児神話，性別役割分担，子育て協働意識など），⑦子供の家庭教育（子供に体罰を加える原因など）．⑧子育て支援などの内容が含まれている．

表2　家族形態

	核家族	三世代家族	ひとり親家族	ひとり親三世代家族	その他	不明
岡山	468（71.8）	82（12.6）	20（3.1）	10（1.5）	27（4.1）	45（6.9）
大連	115（76.7）	20（13.3）	1（0.7）	9（6.0）		5（3.3）
上海	96（78.7）	25（20.5）	0	0	1（0.8）	0

単位：人（％）

表3　最終学歴

	中高卒	専門学校卒	短大卒	4年生大学卒親	大学院終了	その他
岡山	186（28.5）	115（17.6）	181（27.8）	161（24.7）	4（0.6）	4（0.6）
大連	63（42）	32（21.3）	31（20.7）	15（10）	26（17.3）	1（0.7）
上海	24（19.7）	12（9.8）	29（23.8）	46（37.7）	18（14.8）	1（0.8）

単位：人（％）

研究結果

1．調査対象の就労形態

母親の就労形態については図1に示すとおりであるが，「専業主婦」，「常勤勤務」，「非常勤勤務」，「自営業」と大きく四種類に分け回答してもらった．上海と大連は専業主婦の比率がそれぞれ1.6％と2.7％と低いのに対して岡山は31.3％と高い．「常勤勤務」は上海82.8％，大連86.7％，岡山25.9％で，上海・大連は岡山よりほぼ3倍も高い数値となっている．「非常勤勤務」は上海4.9％，大連4.0％，岡山29.4％となり，岡山の方が高い．「自営業」は上海8.4％，大連4.7％，岡山8.9％となり，いずれも10％未満となっている．

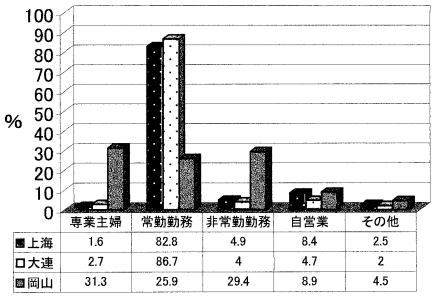


図1　母親の就労形態

2．子育てに当たって焦り感と負担感の有無について

「自分のやりたいことができなくて焦る」（図2）について「よく思う」と「時々思う」を合計すると上海と大連ではそれぞれ81.2％と91.3％にものぼった．逆に「思わない」はそれぞれが18.0％，8.7％となる．「思う」人の比率は「思わない」を遥かに上回り，その差は著しかった．

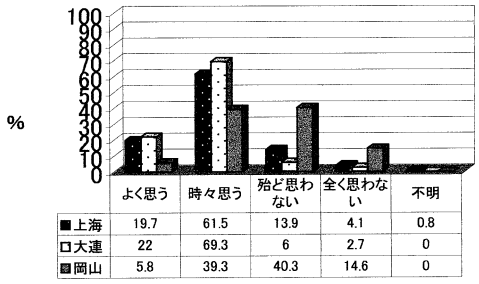


図2　やりたいことができなくて困る

これとは対照的に，岡山は「よく思う」と「時々思う」を合計すると45.1％になり，逆に「殆んど思わない」，「全く思わない」と否定する人は54.9％となる．「思わない」人の比率は「思う」より10ポイント低い結果となった．

「子どもを育てることが負担に感じられるか」（図3）について岡山の調査対象から「思わない」は71.7％が多く，逆に「思う」は28.2％と少い．「負担感」を否定する比率が2.5倍高く，開きが大きかった．

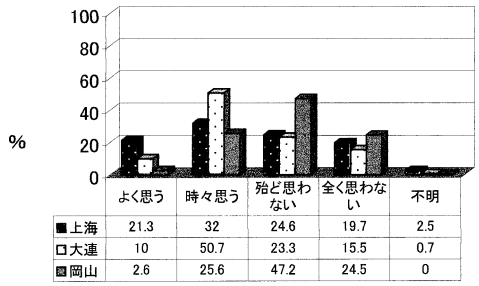
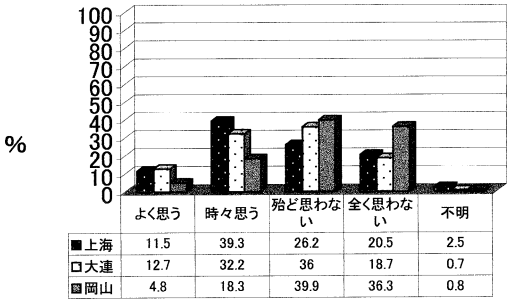


図3　子育てに負担感がある

上海・大連の調査対象は「思わない」はそれぞれが44.3%，38.8%となるが，「思う」はそれぞれが53.3%，60.7%となり，5割以上の人が負担に感じている．負担感の有無についても上海と大連の調査対象は岡山の調査対象より強い傾向が明らかになった．

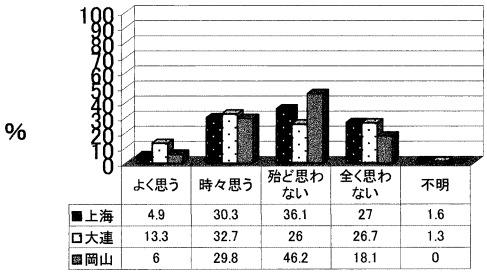
「わたし一人で子育てをしている」（図4）について「よく思う」は上海11.5%，大連12.7%，岡山4.8%で，「時々思う」は上海39.3%，大連32.2%，岡山18.3%となり，岡山のほうがいずれも低い数値を示している．逆に「ほとんど思わない」は上海26.2%，大連36%，岡山39.9%で，「全く思わない」は上海20.5%，大連18.7%，岡山36.3%となり，明らかに岡山のほうが否定する割合が高い．上海と大連は岡山より子育てに対して焦り感も負担感も大きいことから，「一人で子育てをしている」と思う人も多くなっていると推察される．



	よく思う	時々思う	殆ど思わない	全く思わない	不明
■上海	11.5	39.3	26.2	20.5	2.5
□大連	12.7	32.2	36	18.7	0.7
▨岡山	4.8	18.3	39.9	36.3	0.8

図4　私一人で子育てをしている

「体の調子が悪い」（図5）と「思う」は上海35.2%，大連46.0%，岡山35.8%である．「ほとんど思わない」は上海36.1%，大連26.0%，岡山46.2%であるが，「全く思わない」は上海27.0%，大連26.7%，岡山18.1%である．全体的に見ると上海と大連より岡山のほうが「体の調子が悪い」と訴える人がやや少ないようである．



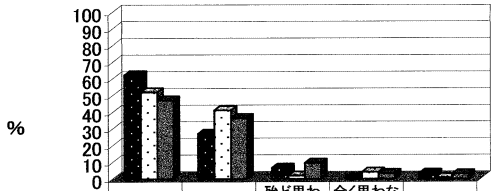
	よく思う	時々思う	殆ど思わない	全く思わない	不明
■上海	4.9	30.3	36.1	27	1.6
□大連	13.3	32.7	26	26.7	1.3
▨岡山	6	29.8	46.2	18.1	0

図5　体調が悪い

上記の四項目の回答状況から上海と大連の調査対象は「焦り・負担・一人での育児・体の不調」を強く感じていることが明らかになった．上海や大連の母親は仕事と子育ての両立が非常に困難な状況にあることが推察される．

3．夫の精神的支えと育児参加状況

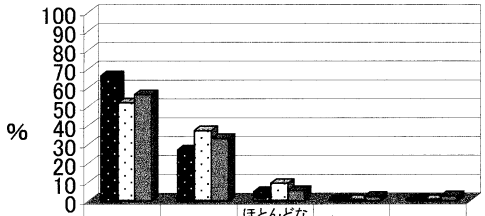
「夫あるいは妻は精神的にあなたを支えてくれるか」（図6）について「はい」と答えた人は，上海89.3%，大連93.3%，岡山83.6%といずれも高い割合である．「いいえ」と回答したのは上海7.4%，大連6.0%，岡山12.7%と岡山のほうがやや高かった．



	よく思う	時々思う	殆ど思わない	全く思わない	不明
■上海	62.3	27	6.6	0.8	3.3
□大連	52	41.3	2	4	0.7
▨岡山	47.1	36.5	9.5	3.2	2.9

図6　夫の精神的支えがある

「夫あるいは妻は子育てに参加してくれますか」（図7）について「ある」が上海93.4%，大連89.3%，岡山89.5%とそれぞれ約9割と高い数値を示している．逆に「ない」は上海5.7%，大連10.0%，岡山7.8%と大連のほうがやや高いが，上海と岡山はいずれも1割未満となっていた．

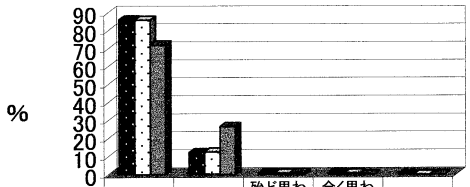


	よくある	時々ある	ほとんどない	全くない	不明
■上海	66.4	27	4.9	0.8	0.8
□大連	52	37.3	9.3	0.7	0.7
▨岡山	56.4	33.1	5.5	2.3	2.6

図7　夫は育児参加をする

4．子育てに伴う感情について

「子どもと一緒にいることが楽しいか」（図8）に対して「そう思う」と回答した人は，上海98.4%，大連98.7%，岡山99.0%と賛成が圧倒的に多い．逆に「そう思わない」はそれぞれ1.6%，1.4%，1.0%と極めて少ない．



	よく思う	時々思う	殆ど思わない	全く思わない	不明
■上海	86.1	12.3	0.8	0.8	0
□大連	86	12.7	0.7	0.7	0
▨岡山	72.3	26.7	1	0	0

図8　子どもと一生にいるのが楽しい

「とても幸せな気分で過ごしている」（図９）に対して「よく思う」と答えた人は上海57.4%，大連50.0%であったが，岡山は31.3%と大きな差が見られた．「時々思う」は上海35.2%，大連39.3%，岡山58%となり，これも差が大きかった．逆に「思わない」が上海4.9%，大連10.6%，岡山は10.3%となっている．回答結果より岡山の調査対象は「幸せ」に対する満足度が上海・大連と比べて低いように思える．

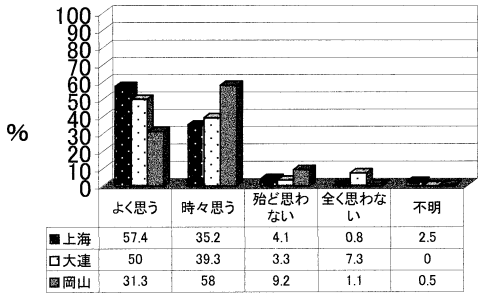


図9　**とても幸せな気分でいる**

「私の生きがいは子育てとは別だ」（図10）について「よく思う」と「時々思う」と答えた人は上海8.2%，大連8.0%と少なかったが，逆に「殆んど思わない」と「全く思わない」は合わせて上海89.4%，大連90%と否定する人が絶対的多数を占めている．一方岡山では賛成は49.7%で，反対と49.1%で，ほぼ同じである．

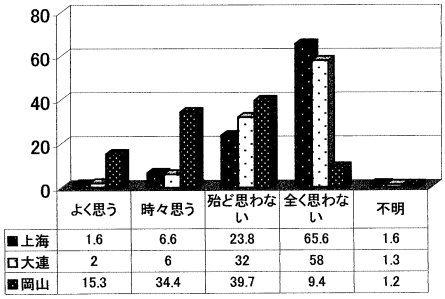


図10　**子育ては生きがいだと別だ**

「私は楽天的でくよくよしない」（図11）について「よく思う」は上海57.4%，大連53.3%となり，逆に岡山は21.2%と２割にとどまった．「時々思う」は上海36.9%，大連32.0%となり，岡山のほうが43.1%とやや高い．しかし，否定した回答を見ると，「殆んど思わない」は上海1.6%，大連12.7%，岡山29.4%との順で多くなっていた．「全く思わない」も1.6%，1.3%，6.0%であり，上海と大連より岡山のほうがやや「くよくよする人」の比率が高かった．

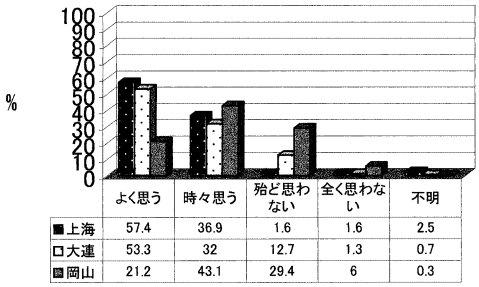


図11　**楽天的でくよくよしない**

５．性別役割分業と夫婦協働

「男は仕事，女は家庭」（図12）という固定的観念について「同感しない」人は，上海72.9%，大連77.3%，岡山77.3%とほぼ同じ水準であった．固定的性別役割分業を否定する意識が女性の間では強まり，女性が性差別を無くそうとする要求が高まっていることをうかがわれる．

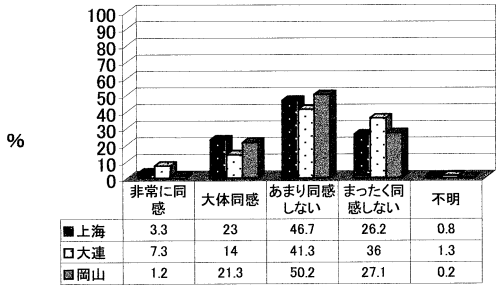


図12　**男は仕事女は家庭**

「子育ては夫婦協働で行うべきだという考え方」（図13）について「非常に同感する」は上海94.3%，大連88.7%，岡山70.1%とそれぞれ差がありながらも同感する人が多い．「大体同感する」は上海4.1%，大連6.7%，岡山28.4%と岡山の方が多い．「あまり同感しない」と「まったく同感しない」を合計すると上海０%，大連3.4%，岡山1.1%となり，いずれも低い．固定的性別役割分業を否定するとともに夫婦協働で子育てをすることに同感する人が圧倒的に多い結果となった．

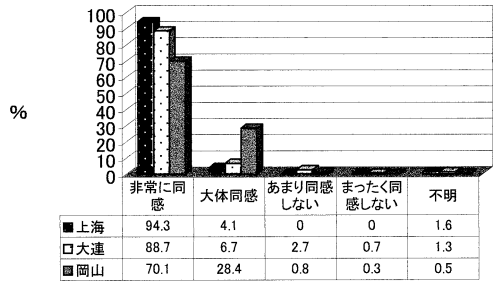


図13　**子育ては夫婦協働すべきだ**

６．子育てに自信があるかどうかについて

「なんとなく子育てに自信がもてないように思う」（図14）の項目について，「よく思う」は上海20.5%，

大連13.3%であるが，岡山は6.9%といずれも差が大きい．「時々思う」は上海20.5%，大連24.7%であるのに対して岡山は54.8%と多く，約2倍になっている．「殆んど思わない」は上海19.7%，大連34.7%，岡山31.3%となっている．「まったく思わない」の割合は上海37.7%，大連26.7%であるが，岡山は7.1%と少ない．岡山の調査対象は6割以上が子育てに自信を持てない状況である．上海・大連も子育てに自信がないと答えた人は約4割にも達している．

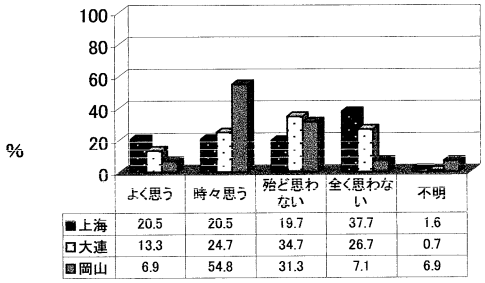


図14　子育てに自信がない

7．三歳児神話について

「子どもが3歳になるまでは，主に母親が子育てに専念すべきだ」（図15）について「同感する」人は，上海39.3%，大連32.7%，岡山62.5%と違いがみられた．「同感しない」は上海59.0%，大連66.6%，岡山37.0%となっている．岡山の調査対象は6割も「3歳児神話」を支持し，上海・大連の調査対象より二倍近く上回っている．

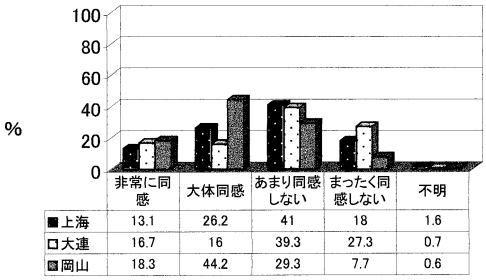


図15　三歳児神話

8．体罰としつけについて

「叱りすぎなど子どもを虐待しているのではないか」（図16）という質問に対して岡山の調査対象については「よく思う」は7.4%で，「ときどき思う」は43.7%と高い割合を占めている．これに対して上海・大連，「よく思う」はそれぞれ4.9%，5.3%で，「時々思う」はそれぞれ19.7%，18.0%となっている．岡山は5割の人が子どもを虐待しているのではないかと心配しているようである．

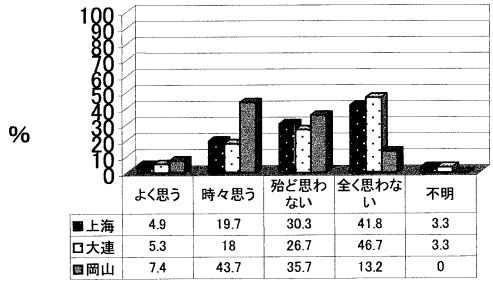


図16　叱り過ぎて虐待をしているのではないかと

「どんな時子供を体罰するか」（図17）について複数回答の形式を取って調べた．「親の言うことを聞かない時」と答えた人は，大連59.3%，岡山47.5%，上海45.9%の順となり，三者の割合を比較して大連の調査対象は最も子供に厳しいことが言える．「だだをこねる時」を選択した人は大連44.7%，岡山26.7%，上海25.4%の順となり，これも同じく大連のほうが子供に厳しい傾向が見られた．「人の迷惑をかけるとき」は岡山37.1%，大連14.0%，上海4.1%の順となり，差が大きい．特に岡山の割合が高い．

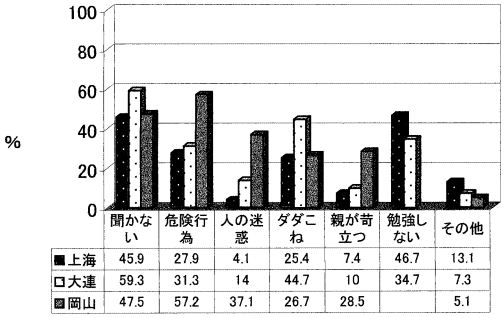


図17　子どもを体罰する原因は

「親が苛立つ時」は上海：7.4%，大連：10.0%となり，いずれも一割未満だったのに対して，岡山は28.5%となり，三割に近い子供たちが大人の不安や不満のはけ口にされている．

9．上海と大連の教育重視志向

上海と大連の調査対象に子供を体罰する原因として「勉強しない」という項目を特別に入れたところ，上海46.7%，大連34.7%という結果が出た．中国において教育重視の志向が表われていた．

上海・大連では「何のためにお子さんを保育園にあずけますか（図18）」（複数回答可）について「教育のために」が上海91.0%，大連92.0%と際だっている．次いで「一人っ子の性格を克服するため」はそれぞれ5割を占める．「保育園を選ぶ条件はなんですか（図19）」（複数回答可）については「教育の条件」を挙げている人は上海91%，大連92%と高い数値を示しており，教育重視志向が明確に表われていた．

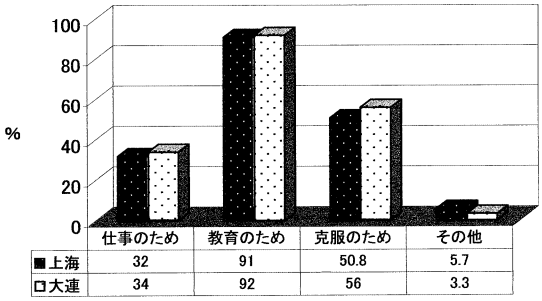


図18　何のために子どもを保育園にあずけるか

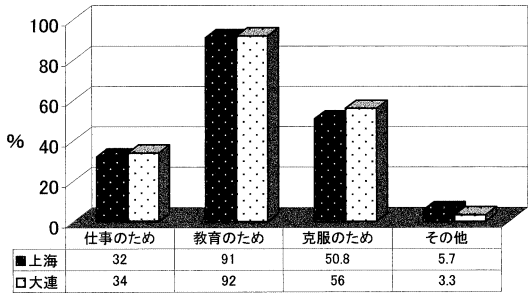


図19　保育園を選ぶ条件

10．子育て環境

「ご近所との付き合いはあるか」（図20）について調べたところ，「よくある」と「時々ある」の合計はそれぞれ上海81.1%，大連77.3%，岡山77.9%となる．「ほとんどない」と「全くない」の合計は18.8%，22%，23.1%となり，接近した数値となっている．

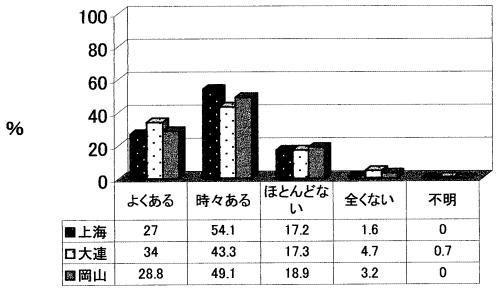


図20　近所との付き合いがありますか

「子育てについて困ったり悩んだりしたとき，相談できる人がいるか」（図21）について複数回答の形式で調べた．

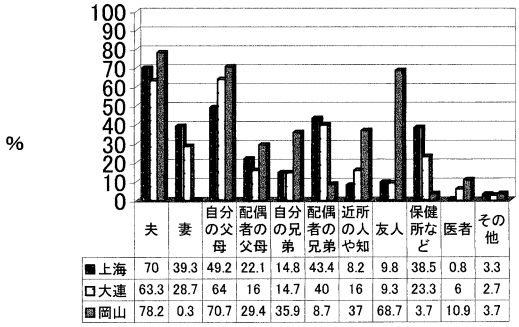


図21　子育てについて相談できる人は

「いる」と答えた人のうち，「夫」と答えた妻は上海70%，大連63.3%，岡山78.5%である．逆に「妻」と答えた夫のほうが上海39.3%，大連が28.7%，岡山0.3%である[†1)]．「自分の父母」は上海49.2%，大連64.0%，岡山70.7%である．「配偶者の父母」は上海22.1%，大連16.0%，岡山29.4%である．「自分の兄弟」は上海14.8%，大連14.7%，岡山35.9%である．さらに「配偶者の兄弟」は上海43.4%，大連40%，岡山8.7%となり，「近所の人や友人」は上海8.2%，大連16%，岡山37%である．岡山のほうが多い傾向が見られる．「友人」は上海9.8%，大連9.3%，岡山68.7%となっている．「保健医」は上海38.5%，大連23.3%，岡山3.7%となり，「医者」は上海0.8%，大連6%，岡山10.9%となっている．

「祖父母は孫の世話をするか」（図22）に示すように上海では80.4%，大連では81.3%の祖父母が孫の面倒を見ている．

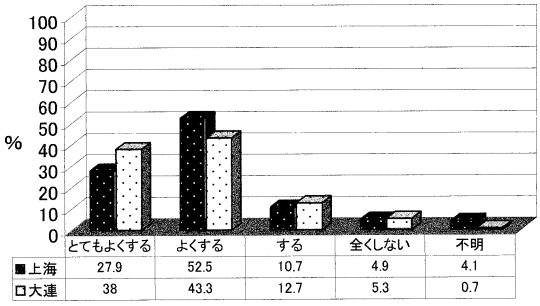
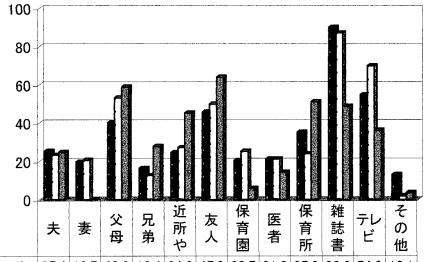


図22　祖父母は孫の面倒を見ますか

11．子育ての知識・情報源について

子育ての知識・情報源（図23）については「配偶者から」と答えた人は，上海45.1%，大連54%，岡山25%である．「父母から」は上海40.2%，大連53.3%，岡山58.9%である．「兄弟から」は上海16.4%，大連12.7%，岡山27.9%である．「近所の人や友人から」は上海24.6%，大連27.3%，岡山45.4%と岡山のほうが多い．「友人から」は上海45.9%，大連50%，岡山64.1%である．「保育園などの組織から」は上海20.5%，大連25.3%，岡山6%である．「医者から」は上海21.3%，大連21.3%，岡山14.4%である．「保育所

の先生から」は上海35.2%，大連24%，岡山51.2%となっている．「雑誌や書籍から」は上海90.2%，大連87.3%，岡山48.9%となり，子供に関する関心度の高いことをうかがわせる．上海と大連は働く母親が多いため，「友人」からというより，都合のよい時間に雑誌や書籍から子育ての情報を求めていることがわかる．「テレビから」が上海54.9%，大連70%，岡山36.3%となっている．



	夫	妻	父母	兄弟	近所や	友人	保育園	医者	保育所	雑誌書	テレビ	その他
■上海	25.4	19.7	40.2	16.4	24.6	45.9	20.5	21.3	35.2	90.2	54.9	13.1
□大連	23.3	20.7	53.3	12.7	27.3	50	25.3	21.3	24	87.3	70	2
▨岡山	24.8	0.2	58.9	27.9	45.4	64.1	6	14.4	51.2	48.9	36.3	3.7

図23　子育てにかんする情報源

研究結果の考察

1．日中女性の就業状況と子育ての精神状態

1）日本と中国の就労形態の違いと保育状況

日本の年齢別女性労働力率はM字型の構造となっている．それは25歳～34歳代のうち，結婚退職・出産退職などの原因で大きく低下しているためである．1986年以降は女性の雇用拡大により「M字のボトムが上昇する傾向を見せている」[1]ものの，多くの女性が結婚・出産・育児期では仕事を辞めなければならない状況は今日も続いている．それは女性にとって仕事と家庭・育児の両立の難しさを示唆している[†2]．

今日の保育状況を見ると「未就学の子どものうち保育園を利用している子どもと幼稚園に通う子どもはそれぞれ約4分の1で，残りの約半数は家庭で保育されている．0～2歳までの低年齢児は16%が保育園に預けられているものの，家庭で育てられている子どもは84%にのぼる」[2]．ここ数年母親の就労が大幅に増加しているために，認可保育園に入園できない待機児童の数は2001年4月には全国で約3万2千人にのぼっている[3]．この数字は多くの母親が家庭内で保育せざるを得ない状況を反映している．ただし岡山の調査では図1からわかるように，専業主婦と常勤と非常勤がほぼ同数になっている．これは本調査の対象が子どもを保育園に通わせている母親であるためである．

一方中国は図1からわかるように約9割が常勤であり，女性労働力率は台形型となっている[†3]．女性は育児期にも退職せずに90日間の産休（有給ではあるが会社によって多少変わる）後職場に復帰しなければならない[†4]．都会では女性が働きやすいように育児環境整備（幼稚園2歳半から未就学まで）がされている．しかし0～2歳半までの低年齢児のための公的保育施設が極めて貧弱・不整備で，穴埋めに私的手段で保育の要望に辛うじて対応している．育児支援に当たっているのは祖父母が最も多い．その他手の空いている近所の年配の女性や農村から都会へ出稼ぎに来ている女性によって支えられている状況である．

中国では入園待機児の統計が行われていないが，「北京，広州，香港における女性の就労に関する研究」によれば北京と広州の女性が「社会の保育サービスの充実を求めるのはそれぞれ92.1%と74.7%であり，「保育所を増やしてほしい」ことを求めるのは85.7%と76%である．家事の「お手伝いさん」やベビーシッタを紹介するサービスの充実を求めるのはそれぞれ75.5%と66%となっている[4]．これらの要求から中国において乳幼児の保育問題が如何に深刻になっているかがうかがえる．

2）子育ての焦り感と負担感

上記のように日本と中国の子育て中の母親は全く異なった社会環境に置かれているようである．それぞれの社会環境の中で，上海・大連・岡山三地の母親はそれぞれどのような精神状態で子育てをしているかということについて比較考察してみる．

母親が就業することは，競争の激しい社会で一つの重要な役割を担うことになる．仕事への責任感・競争に勝つために，自分自身の資質の向上・業績のアップ・会社での人間関係などといった問題を常に考えなければならない．それゆえに働く女性は，とりわけ常勤勤務の人は常に緊張した精神状態であると推察される．

図2と図3に示したように子育てに「焦り感」と「負担感」があると答えている比率は岡山よりも上海と大連のほうが遥かに高いことが明らかになった．上海と大連は常勤勤務の母親が多いだけに仕事と子育てに追われ余裕がなくなるといった焦り感が目立っている．

岡山の場合，母親全体ではやりたいことができない焦りは上海や大連に比べて低くなっている．しかし就労形態別にみると，非常勤や常勤など働いている母親の方が専業主婦より「焦り感」が高くなっている．なお「負担感」については非常勤が最も高く，次いで専業主婦で，常勤が最も低くなっていたが，統計的に有意な差は認められなかった．

日本の場合，「働く既婚女性の「両立」の悩み・ストレスは大きい」が，子育ての負担感が大きいと回答しているのは，専業主婦よりも共働きの女性の方

が少ない」[5] という結果も忘れてはならない．

中国では子育て真っ最中の母親はなぜこれほど「焦り感」と「負担感」が高いのだろうか．その要因として三つ上げられる．まず中国の乳幼児の保育は公的施設が不十分なために，乳幼児を抱える親又は関係者が私的な方法を考えなければならず，子育ての人にとって大きな負担となるだろう．次は経済改革が進むにつれて市場原理が優先され，女性の働く権利を保障する制度が後回しにされ，女性は激しい競争社会で勝ち抜くためには弛みなく努力しなければならない。三つ目は早期教育がとても重視されていることである．ここ数年，経済の高成長を背景に人材が最も重視されるようになっている．高い利益を生み出す頭脳労働者と肉体労働者の報酬には大きな差がある．このような社会現象に刺激され，さらに一人っ子にかける親の情熱が加わり，子供の早期教育に拍車をかけているのである．アンケート調査には子育てに関する自由記述欄を設けたが，その大半が「立派な教育を受け，人材になってほしい」というような内容だった．図18と図19も教育重視の傾向が強く現れている．上記のような諸要素があって上海と大連は子育てに当たって「焦り感と負担感」が高いだけではなく，「私一人で子育てをしている，体の調子が悪い」も強く感じていることが推察される．

２．子育てに伴う感情及び子育ての価値観

１）子育ての肯定的感情と否定的感情

図８に示されたように子どもと一緒にいるのが楽しいと思う母親の比率は上海・大連・岡山いずれも９割以上となり，中国も日本も子どもを愛する母性愛・肯定的感情が強く現れていた．子どもを愛する感情は国や地域の差は見られず，国や民族の違いはないと言えるだろう．

しかし子供に対する普遍的な母性愛・肯定的感情は社会的・個人的・経済的な要因で変わることもある．子育てに伴う感情「幸せ・生きがい」についてみると岡山の調査対象の「幸福感」に対する満足度は上海・大連の調査対象と比較してやや低い．また「生きがい」に対しては上海と大連は肯定的感情が否定的感情をはるかに上回っているが，岡山はほぼ変わらない結果となった．

上海・大連は子育てに対して肯定的感情が高く，岡山の調査対象は否定的感情が高いことから，上海・大連と岡山の母親たちは子育ての意味についてそれぞれ受け止め方が大きく違っていることが推察される．1995年総務庁青少年対策本部では日本・アメリカ・韓国を対象に「子供と家族に関する国際比較調査」を行った．三ヵ国の中で「子育てに対して肯定的感情を他国のようには持ちにくく，否定的感情は他国より強い日本の特徴が際立ってくる[6]」との結果が出された．今回日本と中国を比較考察しても同様の結果が認められた．

２）社会保障と子育ての価値観

ここでは社会状況を視野に入れて子育ての価値観について検討してみる．

戦後，日本は経済大国となり，一躍して世界で屈指の先進国となった．社会が豊かになると子どもを持つメリットが低下するとされているが，それは先進国では社会保障が完備されていて病気の場合は健康保険に頼り，老後は年金があり，子どもへの期待が薄れるからである．また生活水準が高ければ，子どもの養育費，教育費なども高くなる．少子化現象は成熟した社会の特徴の一つであると言える．

一方市場経済化されつつの中国はここ20年の間目覚しい発展を成し遂げたとはいえ，社会保障がまだ完備されていない．「子育ては老後に備える」言い換えれば「老後のために子育てをする」という言葉は中国人の子育ての価値観が反映されている．

今日の中国では全国民に適用される年金制度や医療保険制度が完備されておらず[†5]，大多数の中国人にとって老後の生活保障は子供に頼るしかない．中華民族には尊老敬老の伝統的美徳があり，家族に高齢者の扶養義務があると法的に定められている．上海と大連の調査対象者は子育てに焦り感と負担感がきわめて高いにもかかわらず，七割強の人が「子育ては生きがいだ」と肯定する．その原因はまさにここにある[†6]．

しかし，今20歳代の女性たちは必ずしもこのような価値観を持ってはいない．「結婚しても子供を産まない」，また「たとえ子供を産むとしても30代になってからでないと考えない」[7] と考える女性が増えているという．学歴が高く，高収入で，趣味多彩で，人生の楽しみ方を十分知っているこのような女性の間で21世紀の新しいライフスタイルが確立されつつある．数年後中国も一人っ子政策をとらなくても，人口の自然減少の時代がやってくるだろう[†7]．

３）女性の性別役割分業を否定する意識の高まりと現状

日本の内閣府の「男女共同参画社会に関する世論調査（平成12年）」によると「男は仕事，女は家庭」に「同感しない」は20～29歳で58.7%，30～39歳で61.7%となる[8]．今回子育て中の母親を対象にした調査結果でも図13に示されたように上海・大連・岡山いずれも７割以上の人が「同感しない」．また図14に示されたように夫婦協働すべきだと思う人は上海９割，大連と岡山は７割であった．女性の就労が増えつづける中，家庭・育児・仕事の両立の大変さ

から多くの女性が固定的役割分業を否定する意識が高まっていることが明らかである．

しかし現状はどうだろうか．内閣府の調査を見てみる．男性と女性の一週間の平均家事時間は共働き世帯では妻が4時間33分であるのに対して夫は20分であった．夫が有業で妻が無業の世帯では妻が7時間30分であるのに対して夫は27分であった[9]．このように就労形態に関わらず女性はほとんどの家事や子育てを担っている．

なぜこのようになるのか．平成12年の国勢調査によれば，「子育て期の30歳代の就業時間は最も長い状況になっており，逆に女性就業者では30歳代は短時間就業となっている」[10]．このような労働慣行では子育ての最も大変な時期において男性は時間的に家事の分担が困難な状況にあり，子育てをはじめとして家庭的責任は必然的に女性の肩にのしかかるのである．

今後女性の社会進出が増えるにつれて，「男性に対して仕事優先，女性に対して子育て優先を肯定する」[11] 企業中心の日本社会は大きく変わらざるをえないだろう．こうした固定的役割分担の解消に取り組むことや，家庭においても職場においても男女がともに仕事と子育ての両立が可能となるような風土をつくっていき，男性も女性も自立する精神を確立する必要がある．

上海と大連における性別役割分業意識の変化を見てみる．新中国直後の50年代から中国政府は男女平等という旗印を掲げ，男女の共同参画を推進してきた．雇用の権利や賃金の待遇など男女問わず同じものにしてきた．しかし，今日は経済改革により，能力主義が支配的になり，企業の淘汰，人員の削減が頻繁に行われている．やる気のない女性は常に失業の危機に陥っている．1990年代に「女性は家に帰れ」という説さえ蔓延していた[12]．このような社会変化の中で，性別役割分業を支持する人が今後も増えるのだろう．

4．根深い三歳児神話とより適切な子育て支援の必要性

「子どもが3歳になるまでは，主に母親は子育てに専念すべきだ」という三歳児神話に関する意識調査が数多く行われてきた．田中氏は2000年に男女同学の四年生大学の教職学科の受講生（121人）を対象に調査を行い，女子学生の64%，男子学生の82%が賛成するという調査結果[13] を出した．次に同年八重樫氏らは四年制女子大生300名に対して同様の調査を示した．「近い将来母親になる女子大生の9割が三歳児神話を肯定している」[14] という研究結果が出された．日本の母親の就業率が限定的である事実は「三歳児神話」が根深いからであろう．

今回の研究に当たって保育園や幼稚園を利用する，または子育てをしている母親を対象に調査を行った結果，岡山では「3歳児神話」を支持する母親は6割に達している．「3歳児神話」が若い世代の間では依然として深く根付いている現実を改めて認識させられた．調査の中で，多くの人が固定的性別役割分業には賛成しないながらも，性的役割分業から派生した「3歳児神話」に執着するという矛盾が生じていることが分かった．育児不安を生む原因の一つとして専業主婦の育児不安を軽減させるための育児支援も必要だと考えられる．

5．体罰と虐待としつけから見た日本人と中国人の価値観

生まれながらにして善悪をわきまえる子どもはいない．幼児のときから親が「していいこと」と「してはいけないこと」を教えて，子どもが初めて立派に成長できるのである．どの民族も子供のしつけを重視していると思う．しかし，その民族性，文化と価値観によってしつけの内容が大きく変わってくる．さらに，しつけのために体罰もたびたび伴うだろう．その体罰のとらえ方によっては虐待と理解されることもある．

日本では70年代後半から児童虐待の件数が急増し，深刻な社会問題となっている．メィデアでも事件が起こる度に大きく取り上げている．児童虐待についての認識も常に新たにされている．このように親は虐待に対する不安にさらされている．

今回の調査対象の中で岡山は5割の人が「叱りすぎなど子どもを虐待しているのではないか」と心配しているようである．最も目を向けなければならないのは，岡山は3割近くの調査対象が「苛立つ時に」子供を叩き，不安や不満を抱える大人は子どもをそのはけ口としている現状がうかがわれることである．これは子どもを持つ母親がかなりの割合で育児不安を感じていることを示している．その不安を解消するには何らかの形の育児支援と夫の育児参加が必要ではないかと思われる．上海と大連では継家庭での子どもの虐待はたまに発生しているが，それ以外はあまり問題視されていない．

「子供を体罰する」原因について，上海・大連・岡山の間に大きな違いが見られた．「親の言うことに逆らった時」と「だだをこねる時」の回答状況から大連が最も子供に厳しい傾向がうかがわれた．「人に迷惑をかける時子どもを叩く」ことから岡山は上海と大連より割合が高かったことがわかった．

以上のことから，一人っ子が98%も占める上海と大連では子供を甘やかしている傾向が推察される．なぜ中国で一人っ子が「小皇帝」，「太陽」と呼ばれ

ているのか理解できる．今回「勉強しない時に子どもを叩く」という項目を特別に入れたところ，上海は4割，大連は5割の人が勉強しないことで子どもに体罰を加えている．勉強に対して最もきびしい中国の教育重視の志向が見られた．甘やかしていることと教育にきびしいことの矛盾も大変顕著である．図18と図19に示されたように上海・大連はそれぞれ9割の人が「教育のため」に子どもを幼稚園にあずけると考え，しかも幼稚園を選ぶ際も最も「教育の条件」を重視する．このように上海・大連や中国全体が教育重視の志向が極めて強い結果が明らかになった．

6．地域による子育て支援の効果

「子育てについて困ったり悩んだりした時相談できる人」や「子育ての情報源」について「友人」と答えた比率は，岡山の方が極めて多かった．専業主婦についてはそれは育児支援などの活動を通して母親たちの交友範囲が広くなっていることが推察できる．そしてここ数年市町村では母親クラブ・子育てサークル・乳児クラブ・子育て広場などの活動が盛んに行われているために，母親たちの連携ができているからではないかと思われる．このような活動の展開により育児不安がある程度緩和され，その効果が期待できると考えられる．

一方岡山では専門機関を相談相手や情報源としてあげる母親は極めて低かったが，上海と大連では保健医と答える比率が高かった．中国の場合は児童の健康管理として保育園または幼稚園に所属しない子供は定期的に保健所で検査を受けることが義務付づけられている．保健所の担当医は子供の健康管理のためのよきアドバイザーとなり，子育てに関して専門的な指導員となっていて，人々の信頼を受けている．国営テレビでは週に一回の割合で子育てに関する番組が夜間にあり，子育てに自信のない若い父親と母親のよき情報源となっている．町内では各家族のことをよく知っている長老や主婦が選ばれ，（区政府から生活最低限の報酬をもらう）子どもの虐待，生活困窮，不審人物の割り出し，夫婦喧嘩などの状況を把握し，住民のよろずの問題解決をはかり，力の及ばない時は関係部門に連絡をとるなどして地域の安定に重要な役割を果たしている．

ま　と　め

岡山・上海・大連における女性に就労形態及び生活意識や価値観や子育ての意義などについて比較考察をした結果，上海・大連は子育てに対して肯定的感情が高いが，岡山の調査対象は否定的感情が高いことが分かった．この結論は96年総務庁青少年対策本部によって行われたアメリカ・韓国・日本の国際比較調査結果と一致している．

女性の社会進出が増えるにつれて性別役割分業を否定する意識が高まっている．しかし現実では日本の労働慣行は子育ての最も大変な時期でも男性の家事分担が困難な状況にあるために，「男は仕事，女は家庭」という社会的風習は依然として根強く残っている．多くの女性は固定的性別役割分業には反対しながらも，性的役割分業から派生した「3歳児神話」に同感するという矛盾が生じていることが分かった．このような矛盾は一層育児不安を増大させている．今後家庭・地域・企業に男女共同参画意識を啓蒙していくような対策が緊急の課題となってくるであろう．

岡山の調査対象の3割が「苛立つ時に」子供を叩き，不安や不満を抱える母親は子どもをそのはけ口としている現状が分った．また岡山の調査対象の中では半数もの親が「子どもを虐待しているのではないか」と不安にさせられていることは危惧すべきことであろう．子どもを持つ母親がかなりの割合で育児不安を感じている．したがって，働く女性のための育児支援はもちろんのこと，専業主婦・短時間就労の女性のための育児支援も含めた多様な育児支援が必要だと考えられる．さらに子どもの健康管理・栄養状況・心理分析などの面における育児支援を強化し，専門家や関係者による育児経験の不足な母親のサポートも必要であろう．

中国は女性の子育て期間にも高い労働力率が保たれ，いわゆる台形型の就業形態となっているが，乳幼児の育児環境が不十分であることから子育てに伴う焦り感や負担感が著しく高かった．しかし，子育てが大変困難な状況にあるにもかかわらず，「子育ては生きがいだ」と子育てに対して肯定的に捉えるところは興味深いことであった．

中国においては今後経済が発展するにつれて西欧諸国と同様保育を含む家事労働が商品化されることが予測される．したがって公的な保育サービスだけではなく，民間（私的）による多様な保育サービスの充実を図っていくことが重要な課題となってくるであろう．

今回の研究のためデータを採集するために上海外国語小学校長沙堤，元復旦小学校長黄虎英，普蘭店住民孫淑蘭，山根俊子先生のご協力を頂きここでお礼の意を表します．

注

†1）ここの数字から見て，アンケートの回答者は日本と比べて，中国のほうが男性が積極的に係っていることが明らかである．

†2）女性は育児期になると自己実現のできる職場を離れるか，子どもをあきらめるか，独身でいるかというように一人一人が苦渋な選択を強いれる．「やむを得ず仕事をやめ，子育てに専念した母親は，女性の役割が強調される中で，ますます育児不安を増大させ，母子関係をゆるがせる可能性もある（八重樫牧子（2001）川崎医療福祉大学会誌 Vol.11No.2 母親の就労が女子大生の就労観や子育て観に与える影響について P249）．今や晩婚化・晩産化現象が起こり深刻な社会問題となっている．厚生労働省が発表した人口統計動態統計によると2002年度の合計特殊出生率が1.33にとどまる低水準となり，史上最低となった．

†3）中国の年齢別女性労働力率は15歳～19歳の若年層と50歳～54歳定年層の就業率がそれぞれ68％と62％と低く，その他の年齢層（25歳～34歳も含む）では81％～91％の水準を維持している（蒋萍（1997.1）婦女雑誌　女性の就業率の分析中国人口科学 P39～44）．

†4）育児期の女性は今まで積んできたキャリアに影響が及ばないようにするために，法定産休期間内に職場に復帰する人も多い．

†6）老後の生活保障はこれまで勤務先の職場によってはかられるのが原則である．経済改革の進展に伴って，経営管理体制の合理化がはかられ，企業の倒産やリストラなどで現行の生活保障も決して安定したものではない．さらに人口の八割を占める農民の社会保障がないのが現状である．

†7）中国は市場経済化の国であるためにまた子宝という伝統があったために1971年の時点では女性一人当たり出産した子供の数は5.44人で，そのために人口急増の圧力が大きくて，経済発展に大きな負担をもたらす事態となった．1979年から人口の急激な増加に歯止めをかけようと晩婚と晩産を奨励すると共に，一組の夫婦は一人の子供しか生んではいけない，つまり「一人っ子政策」が打ち出されたのである．その結果，1998年には出生率が1.84人にまで下がっている（人民日報（海外版）「計画生育の成果」1999.10.12）．

文　　献

1）厚生白書2000．
2）内閣府：2001年度国民生活白書，80．
3）厚生白書：H12．http//www.mhlw.go.jp．
4）劉小聡他：中国人口年鑑中国社会科学院研究所編：北京，広州，香港に置ける女性の就労に関する比較研究，555，1991．
5）子ども未来財団：「子育てに関する意識調査」，72，2000．
6）総務省青少年対策本部：子どもと家族に関する国際比較調査報告書，159，1995．
7）社会科学院の調査，人民日報，1999年３月８日
8）内閣府：男女共同参画白書，43，2001．
9）前掲書８）44
10）厚生労働省：女性労働白書，62–63，2001．
11）二宮厚美：家族的責任の分担，女性白書，61ほるぶ出版，2001．
12）90年代都市における女性就労に関する研究，中国婦女報，1997.2.6.3面
13）田中文子：個人がのびやかに生きる社会に，現代のエスプリ，No.408，194–203
14）田中文子：個人がのびやかに生きる社会に，現代のエスプリ，No.408，194–203

（平成14年11月25日受理）

Comparative Study on Child-Raising in Okayama, Shanghai and Dalian

Bo JINAG, Masami SASAKI, Makiko YAEGASHI, Zu Qiong XU and Ryoko ISHIKAWA

(Accepted Nov. 25, 2002)

Key words : CHILD-RAISING, WORKING MOTHER, SENSE OF VALUE, GENDER-BASED ROLE-DIVISION, DOMESTIC EDUCATION

Abstract

This article is an attempt to compare three cities–i.e. Okayama, Shanghai and Dalian–and to explore the effects which some factors–e.g. whether mothers have a job, the length of their working hours, the improvement of the environment for child rearing and social conditions–are having on the meaning which child rearing has to those mothers, their sense of value of child rearing and their views on domestic education and training.

The results reveal that the mothers' working situations directly affect their child rearing, and that their sense of value of child rearing varies with their nation's affluence and social welfare. It is interesting that although women's labor force participation rates in Japan and China form an M curve and a trapezoid one, respectively, the ratios of their attitude against the gender-based role-division in the two countries should be at the same level.

Japan and China, both Asian countries, have been active in exchanges with each other since ancient times, so that they once shared a great part of various areas like culture, religion, traditions and others. In our time, however, the two countries turned out to be different in domestic education and training of children.

This work is expected to contribute, as a result of joint research in Japan and China, to the 30th anniversary of the normalization of diplomatic relations between them.

Correspondence to : Bo JINAG

Department of Medical Social Work, Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.12, No.2, 2002 197–208)